

英語における「書くこと」に関する協調学習の効果について[†]

岡 圭佑*・久保田善彦**

上三川町立上三川中学校*

宇都宮大学教育学研究科**

英語教育において、対話的な学びが注目されている。これまでも、「話すこと」・「聞くこと」の口頭でのコミュニケーションがペアやグループで行われてきた。これに加え、「読むこと」や「書くこと」の課題を複数人で解決する協調学習が行われている。本研究では、第一に、英語の「書くこと」における協調学習の効果を実証的に検証する。第二に、協調学習のポイントについて会話分析から検討する。

キーワード：協調学習、対話的な学び、英語教育、書くこと、会話分析

1. はじめに

中央教育審議会（2016）では、『子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である。』と述べられている。特に、「対話的な学び」については、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」こととされ、注目されている。

2. 対話的な学びと協調学習

(1) 英語教育における対話的な学び

これまでも英語教育において、対話的な学びに関する研究や実践が行われてきた。

第一に、対話的な学びにより学習意欲が向上するとする実践研究がある（例えば、江利川2010、盛岡2014）。第二に、「話すこと」や「聞くこと」の

ようにコミュニケーションを通して、その能力を伸ばそうとする研究がある（小林, 2014）。コミュニケーションを重視する現代の英語教育では、多数の実践が行われている（例えば、太田ら2003、高橋2001）。第三に、「書くこと」や「読むこと」の課題を、複数人で問題解決をする実践や研究がある。第三のように、複数人で問題解決を行う学習について、三宅ら（2016）は協調学習と定義している。

(2) 英語教育における協調学習

三宅ら（2016）によれば、協調学習は「建設的相互作用を通して、学習者が考えを深める活動」とされる。ここでいう建設的相互作用は、課題遂行とモニタリングによって起こるとされている。課題遂行とは、自分自身の考えを外に出して考えてみる場面のことである。また、モニタリングとは他者の言葉や活動を自分の考えと組み合わせ、よりよい考えをつくる場面のことを示している。

英語教育における協調学習の実践や研究は、以下が報告されている。鈴木ら（2016）の研究では、リーディング活動に協調学習を取り入れることで、英文の内容理解が深まることを明らかにしている。また、根本（2012）は、読まれた英文を聞き、その英文を再構築する活動を協調学習のタスクとして用いることで、英文を書く力が向上したことを報告している。阿部ら（2012）は、ライティング活動に協調学習を取り入れることは、語彙についてのアドバイスを受けたり、ライティングの内容的な要素を協力して考えたりすることができ、有益だと報告している。

このように、英語における「読むこと」や「書くこ

[†] Keisuke OKA*, Yoshihiko KUBOTA**: The effects of collaborative learning in English writing

Keywords: Collaborative learning, Dialogical learning, English education, Writing, Conversation analysis

* Kaminokawa Junior High School

** Graduate School of Education, Utsunomiya University

(連絡先: kubota@cc.utsunomiya-u.ac.jp 著者2)

と」の協調学習は研究されてきているが、その効果を実証的に示しているものは多くない。本研究では、特に「書くこと」における協調学習の効果に注目する。

3. 研究の目的

本研究では、英語における「書くこと」の協調学習の効果とその要因を実証的に検証する。

4. 研究の方法

(1) 研究手続きの検討

白水（2015）は、公立小学校の6年生、のべ110名を対象に調査を行い、算数におけるペアでの協調学習の効果について分析している。この研究では、全国学力学習状況調査のB問題のうち、平均正答率が40%を切るものが調査問題として用いられた。手順は、個人で問題に取り組み、答案の回収後、無作為のペアで再び同じ問題に同じ時間で取り組ませるというものだった。ペアでの会話は、ビデオとICレコーダーで記録が行われた。そして、一部の児童には、遅延テストとして1人で解き方を説明させている。

分析の結果、個人よりもペアの場合に正答率が高まること、ペアのうち1人でも解けているメンバーがいれば、ペアでは正解に至ること、2人とも個人では解けていなくても、ペアで解けることがあることなどが報告されている。また、解けるペアの会話を分析すると、「理由・根拠」について話し合っていることが明らかにされた。「理由・根拠」に言及せずに正答となったペアもあるが、遅延テストは理解していなかった。

本研究では、この白水の研究を参考に、英語における「書くこと」に関する協調学習について調査を行う。

(2) 調査の対象と時期

栃木県M中学校第3学年3クラス、計71名を対象とする。調査は、平成28年12月2日に実施し、遅延テストを平成28年12月19日に行った。

(3) 調査の方法と手順

「書くこと」についての調査問題には個人で20分、取り組ませた。その後、同一の問題を同一時間で4名又は3名の無作為グループで解かせた。白水の研究では、ペアで実施しているが、調査協力校の英語教員のアドバイスにより、通常の学習形態に合わせ、4名又は3名のグループで行うこととした。グループで問題を解く際は、グループで1つの解答をだすのではなく、自分の解答をより良いものにすること

を目的として伝えた。そのため、個人で取り組んだ解答用紙は回収せず、新たに解答用紙を配布した。また、話し合いは日本語で行ってもよいこととし、話し合いの様子は、ビデオで記録を行った。グループでの解答後には、意識調査を行った。さらに遅延テストを実施し、学習内容が定着しているかを分析した。白水は遅延テストにおいて解き方の説明をさせたが、今回は、個人及びグループと同じ調査問題に取り組ませた。

(4) 調査問題の開発

調査問題は国立教育政策研究所が平成22年に中学校第3学年を対象に実施した、特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）の中から抽出した。白水の研究を参考に、正答と準正答を合わせた通過率が40%前後の問題を選んだ。さらに、協調学習が成立しやすい条件として三宅ら（2014）が挙げる「解決過程の見えやすさ（共有可能性）」と「試みの正誤判断のつきにくさ（局所的正誤判断困難性）」を考慮し、問題を検討した。開発した調査問題は大問3問、小問6問から構成されている。

(5) 得点化の方法

国立教育政策研究所による「特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）調査結果（中学校）」の解答類型を参考に、得点化を行う。解答類型では、正答と準正答及び誤答に分類されている。しかし、その内容に開きがあるため、準正答を2つに分類し、正答を3点、準正答を2点又は1点、誤答や無回答については、0点とした。

(6) 分析の方法

①意識調査

グループでの話し合いの終了後に5件法の質問紙調査を行った。全6問の意識調査を集計し、分析する。

②合計得点

調査問題の得点を合計し、個人、グループ及び遅延での平均点の推移を一要因分散分析にて比較する。ただし、調査対象71名のうち、分析の対象は59名とした。これは、欠席した生徒や誤った方法で解答を行った生徒、時間が不足し回答ができなかったと判断できる生徒を分析の対象から外したことによる。

③問題形式による特徴

調査問題を問題の形式ごとに3種類に分類し、それぞれについて一要因分散分析を行う。分類は、問題1（1）を「日本語で解答する問題」、問題2（1）

～ (3) を「英語で空欄を補充する問題」、問題1 (2) 及び3を「英語で文を書く問題」とする。

④グループでの会話

ビデオ記録から、グループでの会話を分析する。会話の様子と得点の変化の関係を分析し、よりよい話し合いの方法を検討する。

5. 結果

(1) 意識調査

「グループ活動では、他のメンバーと協力して、活動に取り組んだ。」の質問は、9割以上の生徒から肯定的回答を得た。また、グループで「教えてもらうこと」と「教えること」は、教えてもらったと感じる生徒が多い。「グループ活動を通して、自分では思いつかなかったような新しいアイディアに気付いた。」の質問は、約8割の生徒が肯定的に回答している。「話し合いを通して、英作文を改善することができた。」の質問は、7割以上の生徒が肯定的に回答している。

「話し合いを通して、英作文を改善することができた。」の質問に対し、肯定的な回答した生徒を対象に、話し合いを通して「何を」改善することができたかを複数回答可で回答させた。その結果、半数近くの生徒は「英文の内容」と回答している。

(2) 合計得点の変化 (表1)

合計得点について分散分析を行った結果、その差は有意であった ($F(2, 116) = 26.14, p < .01$)。Holm法を用いた多重比較によると、個人 < グループ ($\alpha' = 0.02$)、個人 < 遅延 ($\alpha' = 0.05$)、グループ > 遅延 ($\alpha' = 0.03$) となった。

また、グループの得点に注目すると、個人の時と比較し、7割近くの生徒の得点が上昇した。

(3) 問題形式ごとの得点変化 (表1) とビデオ分析

①日本語で解答する問題：問題1 (1)

分散分析を行った結果、その差は有意であった ($F(2, 116) = 3.33, p < .01$)。Holm法を用いた多重比較によると、個人 < グループ ($\alpha' = 0.017$)、個人 = 遅延 ($\alpha' = 0.05$)、グループ = 遅延 ($\alpha' = 0.023$) となった。各テストとも平均点は高い。

ビデオからは、問題の難易度が低いため話し合いの必要性を感じていない様子が見られた。

②英語で空欄を補充する問題：問題2 (1) ～ (3)

分散分析を行った結果、その差は有意であった ($F(2, 116) = 15.44, p < .01$)。Holm法を用いた多重比較によると、個人 < グループ ($\alpha' = 0.017$)、個人 < 遅延 ($\alpha' = 0.023$)、グループ > 遅延 ($\alpha' = 0.05$) となった。

得点が向上したグループのビデオからは、①日本語による文脈の理解 ②日本語解答案 ③英語解答案 ④単語のスペルや文法を改善するというステップにより、話し合いが行われることで、正答が導かれていた。一方で、解答をグループで1つに統一させるグループもある。問題2 (1) ～ (3) のいずれかにおいて、メンバー全員で解答を同一としたのは18グループ中、8グループである。解答をそろえることで、多くのグループは得点が上昇するが、一部では低下した。

③英語で文を書く問題：問題1 (2), 3

分散分析を行った結果、その差は有意であった ($F(2, 116) = 7.42, p < .01$)。Holm法を用いた多重比較によると、個人 < グループ ($\alpha' = 0.0167$)、個人 = 遅延 ($\alpha' = 0.0500$)、グループ > 遅延 ($\alpha' = 0.0250$) となった。これらの問題は、自由英作文の問題であり、それぞれ「15語以上」や「3文以上」といった条件があったこともあり、低い得点となった。

得点が向上したグループのビデオからは、メンバーの解答から新たな視点に気づいたり、メンバーからフィードバックをもらえたりしている様子が見られた。特に、解答用紙を見せながら説明し合う様子が見られた。一方で、口頭のみで交流したグループでは、細かい文法のミスなどが改善されていない。

6. 考察

意識調査の結果から、協調学習についておおむね好意的な回答が得られた。また、グループ活動は、文法や形式といった英語の知識よりも、英作文の意味内容についての話し合いが多いことが推察される。

合計得点の変化から、協調学習の効果が明らかになった。また、時間をおいても、協調学習の効果はある程度維持されることも明らかになった。問題形

表1 合計得点と問題形式ごとの得点

		個人	グループ	遅延
合計	N	59	59	59
	Mean	9.0	11.6	10.2
	S.D.	5.0	3.1	4.6
日本語で解答	Mean	2.1	2.5	2.2
	S.D.	1.2	0.9	1.1
空欄補充	Mean	4.7	6.3	5.6
	S.D.	2.8	1.9	2.8
英語で解答	Mean	2.2	2.8	2.4
	S.D.	1.8	1.6	1.8

式ごとの得点変化からも、すべての形式で協調学習の効果が明らかになった。英語で空欄を補充する問題は、遅延テストでも効果が認められた。

ビデオ分析から、生徒は問題の難易度によって時間の使い方を変化させていた。また、理解を促進させるには話し合いのステップが重要である。はじめに英文の文脈を日本語で検討するのは、解答の意味理解を深めることに繋がると考える。英作文は、解答用紙を十分に見せ合うことが必要であった。難易度の高い課題には、より高度な共有可能性が求められると考える。

7. 実践への示唆

白水の研究と同様に、英語の「書くこと」においても協調学習の効果が見られ、生徒にも好意的に受け止められた。「書くこと」の指導に、協調学習を取り入れることは有益だといえる。また、話し合いの様子を分析することで、問題の形式や質によって、話し合いの手順や方法が異なることがわかった。

空欄補充の問題では、①文脈の理解 ②日本語解答案 ③英語解答案 ④単語や文法の改善という手順が有効だと明らかになった。協調学習の前に、模範となる話し合いの手順を示すことで、より高い効果を得ることができると考える。一方で、空欄補充の問題では、グループで解答をそろえ、同じ解答を書く様子が多く見られた。生徒が、唯一の解答があると考えている可能性がある。あらかじめ、解答が1つではないことを理解させる工夫が必要である。

英語で文を書く問題では、解答用紙を見せ、説明し合うことで英文が改善されやすいと考えられる。協調学習を導入する際には、話し合いの仕方について指導することや、解答用紙を相手に見せ合えるような環境をつくることが重要だと考える。

8. 今後の課題

白水も課題として挙げているように、本研究は個人、グループ、遅延と同じ問題を3回繰り返し解かせている。これにより、得点や理解が向上した可能性がある。繰り返し問題を解くことに影響されない研究計画が必要である。

今回は、学力層に応じた分析は行っていない。協調学習を行うことにより、それぞれの学力層の得点がどのように変化するのか、また、グループの構成メンバーの学力層の違いが協調学習の効果にどのような影響を

あたえるのかなどについて、明らかにしたい。

引用・参考文献等

- 阿部真・山西博之 (2012)：協働的英語ライティングの効果検証：協力・補助・相違の3観点から、日本教育心理学会総会発表論文集 (54), 111
- 江利川春雄 (2010)：英語教育に“なぜ”“どう”協同学習を導入するのか、英語教育7月号, 10-13
- 小林恭子 (2014)：コミュニケーション能力の向上を目指した授業づくり—4技能の総合的な育成や発信力の向上を目指す工夫—、滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要 (56), 92-97
- 国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査（英語：「書くこと」）」：
http://www.nier.go.jp/kaiatsu/tokutei_eigo_2/
- 三宅なほみ・東京大学CoREF・河合塾 (2016)：協調学習とは—対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業—、北大路書房
- 三宅芳雄・三宅なほみ (2014)：教育心理学概論、一般財団法人 放送大学教育振興会
- 盛岡貴昭 (2014)：協同学習理論を活かしたペア・グループ活動への取り組み、大阪商業大学論集 9 (4), 123-135
- 根本章子 (2012)：中学校における協同学習の効果—ディクトグロスの検証—、EIKEN BULLETIN 24, 107-121
- 太田洋・柳井智彦 (2003)：〈英語授業改革双書45〉“英語で会話”を楽しむ中学生—会話の継続を実現するKCGメソッド、明治図書出版
- 白水始 (2015)：B問題を二人で解いたら？～算数科における効果的なペア学習へのヒント～、初等教育資料5月号, 86-89
- 鈴木悦子・赤松猛・小野章 (2016)：英語科における協働的学習による「理解の深まり」について、中学教育：研究紀要 (47), 77-81、広島大学附属東雲中学校
<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039567>
- 高橋正夫 (2001)：英語教育21世紀叢書 実践的コミュニケーションの指導、大修館書店

付記

本研究は、JSPS 科研費 26282030, 26590228 の助成を受けたものである。

平成29年3月21日 受理